
魔女リンダと美女レーヌの諍い

村上まゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女リンダと美女レーヌの諍い

【Nコード】

N7643E

【作者名】

村上まゆみ

【あらすじ】

魔女リンダはひねくれもので悪いことばっかりする三十路半ばの「行かず後家」。しかし幸せになりたい気持ちはあるらしく、素敵な王子さまフェルナンドに恋をした。がしかし、フェルナンド王子は近々、心優しく美しいレーヌ姫と結ばれるとのこと。激しく嫉妬した魔女リンダは自分はレーヌ姫に入れ替わってしまった！しかもレーヌ姫を「豚娘」にしてしまい、奴隷としてこき使う！はたしてフェルナンド王子はこのからくり気付くことができるのか？そしてレーヌ姫は無事、もとの美しい姿に戻ることができるのか？さら

に、魔女リンダの運命は？

昔々、エシユタオルという王国の西のはずれの森に、リンダという名前の魔女が住んでいました。この魔女のリンダは非常に根が陰険で、とても意地悪な粘着質の性格をしておりましたが、本人は自分のそんな性格の悪いところには露ほども気づいてはおりません。リンダはもう三十代も後半で、言い方は悪いかも知れませんが、とつくにとうの立った、いき遅れのいかず後家でした。最も本人はそのことをとても気にしておりますので、リンダの前で結婚の話を何気なくでもしようものなら、その者は哀れな醜いヒキガエルに変えられてしまうことでしょう。ですからみなさんもこうしたデリケートなお話をする時は、まわりを見渡してみても、よく気をつけてからお話したほうがよいかも知れませぬ。

ところで、リンダが朝早く起きて真っ先にすることは、ごほんの仕度などではありません。リンダは美しい白鳥の白い羽毛をむしりとして作ったふかふかのベッドから起き上がると、まず真っ先に魔法の鏡に向かいます。そしてこの頃とみに増えてきたように思われる、目許のちりめんじわや、眉をつり上げるとその拍子にくつきりと浮かび上がる額の横じわや、口許の八の字型のしわにうんざりします。リンダは深々と溜息を着くと、得意の魔法を使って「我が顔面につくしわよ、なくなれ！」と鏡の向こう側の自分に向かって命じました。すると、あらまあ不思議！リンダの顔はしわひとつない、生まれたての赤ん坊のような、つるつるの皮膚へと変化しました。それからリンダは満足と安堵の溜息をひとつ着くと、食卓の檜のテーブルに着くのです。これが魔女リンダの毎朝の儀式なのでした。

魔女リンダは人が滅多に近寄ることのない、樹海の奥深くに暮らしておりましたから、自分が非常に孤独であることを打ち明けるこ

とのできる相手がひとりもありませんでした（だからこそ孤独で、性格がひねくれ曲がってしまったのでしょね）。

魔女リンダは孤児で、彼女の両親はリンダに生まれながらの奇妙な魔力が備わっていることを知ると、恐ろしくなって彼女のこの、人が滅多に寄りつくこともない、樹海の入口に捨てたのでした。ああ、なんて可哀相な魔女リンダ！彼女の両親がもし、彼女を捨てることなく、他の兄弟たちと同じように、愛情を注いで育ててくれたとしたなら……いいえ、こんなことは今さら言ってみたところで、仕様のないことですね。そんなことより、お話を先へと進めることにいたしましょう。

樹海はまるで、神さまのように大きな愛と力をもって、小さなリンダのことを育んでくれました。樹海は他の大勢の人間たちにとっては、恐ろしく厳しい天然の要害のようではかありませんでしたが、リンダのことは我が子のことのように、母親のような愛情を持って優しく慈しんで育ててくれたのです。けれどもリンダが自分と同じ種族である『ニンゲン』のことに興味を持ちはじめるのは、そう遅いことではありませんでした。リンダは時々、樹海の慰めだけでは我慢ができなくなると『ニンゲン』の村や町にちょっとした悪さをしに出掛けてゆきます。大金持ちの高慢ちきな跡取り息子の目をちょっとの間見えなくさせたり、いい気になって着飾っている（ようにリンダの目には見える）花嫁の純白のドレスをあつという間に虫食いだらけにしたり、暖かい家族の一家団欒の一時を、無数のヒキガエルによって台無しにしたり……（ここまでくると、ちょっとした悪さというよりは、ひどく悪質な悪さといってよかったですよね）。

リンダは、他の人間たちには自分と同じような魔力はないのだということにすぐ気づきましたので「自分は特別に選ばれた、優れた種類の人間なのだ」と、ずっとそう思っ生きてきました。だからいくら悪いことをやったとしても、自分は許されるのだと、傲慢にもずっとそう思い続けていたのです。けれども、流石にリンダも三

十歳を過ぎる頃になると、「どうもそれは少し違うらしい、自分がずっとそう思い続けてきたことは、誤りだったらしい」ということに、少しずつ気づくようになってきました。何故なら、自分は他の人間たちのようにあくせく働かなくても、欲しいものはいつでもなんでも魔法で手に入るのに、どうしてだか、自分よりも他のあくせくしている人間たちのほうが、時としてとても幸福そうだったからです。さて、一体これはどういうことなのでしょう。魔女リンダは聡明な頭脳が割れるのではないかというくらい、深く考えこみました。が、さっぱり理解できません。それにもう三十年以上、ずっとこのような考え方ややり方、人生の歩み方をしてきたのですから、今さら自分を変えろというようなことも出来やしません。そこでリンダは腹立ちまぎれに、また村や町に降りていっては、幸福そうに見える人間たちに意地悪をしました。

ところで話は変わりますが、エシユタオル王国にはレーヌ姫という名前の、非常に美しく可愛らしい、この世のものとも思われぬほどの美貌のお姫さまがいました。

レーヌ姫は王さまのお父さまと王妃さまのお母さまからの御寵愛を一身に受け、そのお優しい気性と美貌によって国民の誰からも愛されておいででした。そしてレーヌ姫が十八歳になった時、隣国のカンツォーネ王国の第一王子とお見合い結婚するという縁談がまとめられつつあったのです。もちろん、リンダがこのような誰からも祝福される、幸福そのものの結婚を邪魔する機会を見逃すはずはありません。

リンダはフェルナンド王子がどんな顔をしているのか見てやろうと思ひ、馬車の中でも飛び抜けて立派な、行列の真ん中に位置する宝石の縁飾りの美しい馬車の中を覗いて見ることにしました。するとどうでしょう！そこには憂愁を帯びた表情の、いと悩ましがなフェルナンド王子の輝くばかりの美貌があるではありませんか！魔女リンダはフェルナンド王子の悩ましがな顔の表情を見るなり、ひと

目で恋に落ちてしまいました。リンダは、魔法の鏡の中の遠視の景色はそのままに、極上の杉の樹や松の樹だけでしつらえた家の、豪華な調度品ばかりの室内を歩きまわりつつ、聡明な頭脳で策略を巡らせました。

実をいうと魔女リンダはこのごろ、自分の魔力を継承させるための跡継ぎが欲しくてたまらなくなっていたので、フェルナンド王子こそ自分の魔力を受け継ぐ子供の父親として相応しいと、勝手にひとりぎめしてしまっただけです。

そしてリンダがひとたびフェルナンド王子のことを気に入ってしまったと、あとのことは本人の思った以上に早く進行したのでした

この時のリンダの悪知恵ほど鋭く彼女の脳裏に閃き、また速やかに実行に移されたものは、後にも先にもないといってもいいくらいでした。リンダは悪は急げとばかりに薄暗い樹海の自分の家から姿を消すと、エシユタオルの王城の、レーヌ姫の衣装部屋の鏡の中に姿を現しました。レーヌ姫はフェルナンド王子をお迎えするための衣装を召使いたちと一緒に選んでいるところだったので、突然リンダがなんの前触れもなく鏡の中から現れたことに、深い衝撃を受けていました。そしてふたりいた召使いたちは、小さな叫び声を上げると、衣装部屋から逃げていってしまったのです。

レーヌ姫は驚愕のあまり、声さえでないほどでしたが、リンダの真っ黒いローブに包まれた、禍々しい雰囲気を感じると、彼女が噂の悪い魔女、リンダに違いないと直感しました。

リンダは唾でも吐き捨てるかのように、こう言い放ちました。

「ふん。なんて美しい、綺麗な可愛らしい容貌をしているんだろうねえ、おまえは。だけどそれも今日までのことだよ。おまえは今まで、両親や兄弟たちの愛情を一身に受け、何不自由なく暮らしてきたんだろうが、今日からは何ひとつ自分の思いどおりにならなくなるのさ……もしもおまえがこれからだの醜い召使いの小娘になったらしたら、誰がおまえなんかを相手にするものか。おまえなんか、おまえなんか……えいっ！こうなってしまうえ！」

リンダが魔石の嵌め込まれた檜の木の杖を振り翳すと、衣裳部屋には大きな強い風と、雷のような衝撃とが駆け抜けていきました。そして召使いたちが出ていった扉が物凄い勢いで突然バタンと閉まり、広い衣裳部屋の窓という窓がすべて開き、あたかも激しい嵐が過ぎ去っていったかのようなそのすぐあと、とてつもなく恐ろしいことが、レー又姫の身には降りかかっていたのです。

衣裳部屋のよく磨き込まれた姿見の鏡の前には、灰色のみすばらしい衣装の醜い顔の小娘がひとり、レー又姫から美しさのエッセンスをすべて奪いと、彼女に成り代わった、魔女リンダの姿とがありました。衣裳部屋から逃げていった、レー又姫付きの衣装係たちは、そろりそろりと引き返してくると、部屋の中をそつと覗き込んで、何ことが起こったのかを、その時はじめて知りました。

レー又姫付きの衣装係たちは、鏡に映っている、美しいけれども意地悪な顔の表情の女を見て、もはやこの方はレー又姫ではないと、すぐに気づくことができましたが、打ちのめされたように倒れ伏して、涙を流している女が、あの美しかったレー又姫の変身した姿なのだとは、とても信じるできませんでした。

衣装係の召使いふたりは、顔を隠して蹲っているレー又姫に近付きました。次の瞬間には凍りついたように、何も言うことができなくなりました。レー又姫の顔は一度ちらりと見たが最後、もう二度とは見たくもないと、いいほど、ひどく醜い顔に成り果てていたからです。

両目は落ち窪んで小さく、鼻は豚のように低くそそり立ち、唇は薄い上に、何かを話そうと一度口を開いたが最後、ビーバーのような出っ歯がにゅっと突きでてくるのです。

衣装係の召使いたちは、その顔を一目見るなりころりと態度を変えて、レー又姫に成り代わった魔女リンダのほうに恭しい態度をとりはじめました。魔女リンダはほれ見たことかと言わんばかりに、ふふん、と鼻でせせら笑いました。そして衣装ダンスの豪華なドレスを一着、また一着と、召使いたちに命じて試着することにしたの

でした。しかも、このあまりにショックな出来ことから立ち直れずにいるレー又姫に向かって、こんな暴言すら吐いたのです。

「ぼんやりしてるんじゃないよ！この豚娘ふたむすめ！おまえもわたしの衣装を出したりしまったりするのを手伝うんだ！今日からおまえはわたしの奴隷なんだからね！わたしの手や足も同然にただで働いてもらうよ！わかつたかい！？」

ふたりの衣装係の娘たちは、レー又姫に成り代わった魔女リンダの我が儘に疲れてきつつありました。それでも魔女リンダ　いえ、レー又姫の『豚娘』という言葉を聞くと、ぷつと吹きださずにはいられません。そしてレー又姫と三人一緒に大声で笑って、奴隷となつた豚娘のことを笑いにさえしたのです。

みなさんはなんてひどい話だろうと思っていらっしゃるかもしれませんが、わたしはなんだかこのふたりの侍女のことをあまり責められないような気がします。何故なら醜い姿に成り果てたレー又姫の顔は、そのくらい豚にそっくりだったからです。

レーヌ姫の態度が、その日から我が儘で粗暴で意地の悪いものに変わったということには、周囲の人間の誰しもが気づいていましたが、だからといって醜い奴隷の小娘が実は本当のレーヌ姫なのだと、誰ひとりとして気づくことができませんでした。レーヌ姫の両親や兄弟たちでさえそうでした。いえ、もしかしたらなんとなく薄々はそうと気づきながらも、無意識のうちにも気づきたくない、認めたくないとの思いが強かったのかもしれないね。何しろ、これまで敵対していた隣国の王子が、貢ぎ物をたくさん持って今日の午後にもエシユタオルの王城へ辿り着こうということところだったのですから。

カンツオーネ王国のフェルナンド王子の元には、美しい、この世のものとも思われないほどのレーヌ姫の容貌を模写した肖像画が贈られていましたから、その美しい姫が実はこんな醜い豚娘……いえ、小娘とわかりでもしたら、せつかく仲直りをしたばかりの両国の関係は、一体どうなってしまうことでしょう。

王城の入口から、街の目抜き通りである商店の立ち並ぶ街道までは、ラツパを持った軍の勇士たちがずらりと並び、フェルナンド王子一行の到着をいまかいまかと待ち受けています。

憤み深いお姫さまなら本当は、王城の大広間で謁見の時まで、自分の部屋で身なりを整えるなどしつつ、高らかなラツパの音が鳴り響くのを待っているところなのでしょうが、美しいレーヌ姫の中身は、何しろ今は魔女リンダなのです。リンダはフェルナンド王子の到着が待ちきれず、しぶる召使いにカツをひとつ入れると、馬の用意をさせました。魔女リンダは一国のお姫さまとしてのたしなみなど何ひとつ知りはしませんから、乗馬服姿で馬に跨ると、まわりの人間の制止の声も聞かずに、フェルナンド王子を迎えるため、王城の外へ飛びだしていつてしまいました。そして今はもう醜い小娘と

成り果ててしまったレーヌ姫も、自分に擦り変わった魔女リンダのことがとても気になりましたので、自分で厩舎の馬に鞍を置くと、リンダのあとを追っていったのでした。

ところで、こちらはカンツォーネ王国、第一王子のフェルナンド殿下の揺られている馬車です。

フェルナンド王子は、自分の王国の王都を出発した時からとても憂鬱でした。今の王子はまさに憂鬱の化身といっても過言ではなかったでしょう。何故なら王子と恋仲にあった侍女のヴァージニアが、身分違いの恋を苦に、断崖から身を投げて自殺してしまっただけで、縁談の日にちを先延ばしにしたりすることはあまり得策とはいえません。王子はしぶしぶながら王城を出発し、エシユタオルの王城まで三日の道程をヴァージニアのことばかりを考えて過ごしました。

（ああ、我が愛しのヴァージニア……きみは何ゆえに自殺なんかしたんだい？谷底の川の流れは、さぞかし冷たかったろうね。せめておまえの遺体が見つかるまでは、僕は王城にとどまっていたかったのだが）

フェルナンド王子は、時々涙さえ零して、風光明媚な土地の景色を眺めやっていました。わたしはここでフェルナンド王子とヴァージニアの間柄に関して、公正な意見をみなさんに述べておきたいと思います。まず、ヴァージニアが何故自殺したかということですが、ヴァージニアが自殺した直接の原因はフェルナンド王子にあつたといつて過言でない、わたしはそのように思います。ヴァージニアは身分の低い侍女であつて、まさかフェルナンド王子と結婚できるなどとは夢にも思つてはいませんでした。フェルナンド王子が隣国の第一王女であるレーヌ姫とお見合いと聞いた時も、彼女はシヨックを受けながらも、こうなることはあらかじめわかってたことと、王子の前で涙を見せるようなことさえしませんでした。ところがフェルナンド王子は、王子のことをなんとか諦めようとし

ているヴァージニアに向かって、こんなことを言ったのです。

「ねえ、ヴァージニア。僕はきみを愛しているけれども、カンツォーネ王国の第一王子として、隣国の王女と結婚しなければならぬんだ。僕のこのつらい気持ち、きみならわかってくれるだろう？僕はエシユタオルのレーヌ姫と結婚しなければならぬけれども、それはしよせん愛のない政略結婚なんだ。僕はきみを愛している。だからこれからも……」

ヴァージニアはフェルナンド王子の言葉を最後まで聞かずに走りだすと、王城の背後を天然の外壁のようにとり囲んでいる崖の頂きから、真つ逆さまに身を投げて自殺しました。

こうみなさんにお伝えしても、フェルナンド王子のどこが悪かったのか、みなさんにはさっぱりわからないかもしれませぬ。けれどもそれが女心というものです。だってこれからフェルナンド王子は類い稀なる美姫と結婚しようというのですから、そのあとのヴァージニアの立場は、一体どんなものになるとみなさんは思いますか？いくら政略結婚とはいえ、この世のものとも思えぬ美貌の王女に、フェルナンド王子が心を奪われぬわけがない、ヴァージニアはそう思いました。しかも王子は自分の言葉を、一国の王子としての最終的な決定事項としてヴァージニアに伝えたのでした。

フェルナンド王子は英邁な頭脳と美貌とで知られた、国民にも非常に人気のある王子ではありませんが、小さな頃から周囲の人間に甘やかされて育ったお坊ちゃまでもありましたので、人の心の微妙な揺れ動きといったようなものには極めて鈍い人だったのです。

まあ嘆き悲しんでいるフェルナンド王子のことをこれ以上責めるのも可哀相ですから、ヴァージニアの話はこのくらいでやめることにしておきましょう。

さて、悲嘆に暮れるフェルナンド王子の目に、エシユタオルの王城の、立派な尖塔の連なりがいくつも見えてきました。城下町の人々は、類い稀なる美貌の持ち主と誉れ高い、フェルナンド王子のお姿をひと目拝見しようと、街道の縁に押すな押すなと詰めかけて

きています。エシユタオル軍の正装に身を包んだ兵士たちが護衛にあたっているとはいえ、王子は馬車の窓をぴったりと閉めきり、気さくに親しみを込めて手を振るエシユタオル城下の人々を無視し続けました。やがてフェルナンド王子の無視することのできない人物

レー又姫に化けた魔女リンドが馬に乗ってやってくるまで。

乗馬服姿のレー又姫がゆっくりと白馬を闊歩させてやってくると、エシユタオルの城下町の人々はみな驚いて、不審げにざわめきはじめました。そしてフェルナンド王子が何ごとかと馬車の窓を開けた時、そこには肖像画で見たのと同じ美女、レー又姫の姿があったというわけです。

フェルナンド王子は従者のひとりに馬を止めるよう命じました。

そして馬車から一頭馬を切り離させると、その栗毛の馬に乗ってレー又姫と並んで王城へと進んでいったのです。

ラツパを吹き鳴らす予定であった軍の隊長たちはみな、驚きのあまりラツパを吹き鳴らすのを忘れてしまったくらいでした。まさにそれは息を飲む光景でした

白馬に跨る美女と栗毛の馬に乗る美貌の王子　もつとも、その後ろからねずみ色のフードを目深に被った、醜い豚娘がついてこなければ、ふたりはもつと絵になったことでしょうか……。

といつても、フェルナンド王子はレー又姫の美貌にひと目で心を奪われたとか、そういうわけではありません。フェルナンド王子はただ、レー又姫のことを優しくおしとやかなお姫さまとだけ聞いておりましたので、このあまりにお転婆なふるまいを「面白い」と思っただけだったので。そこでフェルナンド王子はレー又姫のことをひとつ試してやろうという気になりました　果たして彼女は本当に噂に伝え聞いたとおりの優しくおしとやかで機知に富んだ美姫なのかどうか　フェルナンド王子はヴァージニアを失ったことに対する憂さ晴らしとして、まずは小手調べにレー又姫のおつむのほうを調べてやれと思いました。といいますのも、フェルナンド王子にはふたりの姉姫さまがいらっしやっただのですが、ふたりとも容姿

が美しく従順だけでも、少々頭のほうが弱いタイプの女性でしたので、レー又姫もそうに違いないと、王子は前々から怪しんでいたからです（しかもふたりとも美しく機知に富んだという触れ込みで、サイオニアとエシユタオル王国の王子のもとへと嫁いでゆきました）。

フェルナンド王子はレー又姫と挨拶を交わし、天気の話やエシユタオルの城下町の賑わいのことなど、差し障りのない世間話を社交儀礼的に交わしたあとで　突然、こんな謎かけをしました。

「『食らうものから食べものが出、強いものから甘いものが出た』さて、これは一体なんのことでしょうか？美しく、機知に富んだあなたになら、きつとすぐにおわかりのことでしょう」

魔女リンダは謎々が大好きな魔女でしたが、何分、魔女は聖書など読みはしませんので、フェルナンド王子がなんのことを言っているのか、さっぱりちんぷんかんぷんでした。ふたりのあとにほんの少し距離を置いて馬に歩を踏ませていた本物のレー又姫は、自分がその答えを口にできないことをとても残念に思いました　そしてそのうずうずとした思いが堪えきれなくなると、自分に化けた魔女リンダが「まあ、わたくしわかりませんわ」などと氣どって答えているそのすぐ横へと近付いていったのでした。

「『蜜蜂よりも甘いものは何か。雄獅子よりも強いものは何か』王子さまはきつと、士師記の十二番目の士師、サムソンの婚礼の宴でのことを申しておられるのでありますよ」

フェルナンド王子もレー又姫に化けた魔女リンダも驚きましたが、醜い小娘は王子の質問に答えだけを述べますと、再び後ろのほうへと下がってゆきました。フェルナンド王子はその娘の声があまりにも美しく、可愛らしかったので、どんな顔をしているのだろうと興味を持ち、灰色のフードを目深に被っている娘の馬のそばへといつてみることにしました。

「やあ、君はいつたい……」

フェルナンド王子の声はそこで止まりました。王子が娘の顔を覗

き込むようにして見てみると、そこには王子がかつて見たこともないほどの、豚そっくりの顔がありました。

おそらくは娘の声を聞いたあとでなければ、王子には彼女が男か女かもわからなかったことでしょう。

レー又姫に化けた魔女リンドは、王子が本物のレー又姫に近付いたことを腹立たしく思い、醜い小娘にこう厳しい口調で言いつけました。

「しっしっ。あっちへ行っておいで、この豚娘め！フェルナンド王子のお目汚しをするんじゃないよ！」

「申し訳、ございません……」

醜い小娘は消えているような声でそう謝り、王子に頭を下げると、馬を降りました。そしてその場所はちょうど王宮の厩舎が近くにある広場でもありましたので、フェルナンド王子もレー又姫もそこで馬を降りたのでした。

「豚娘！馬を厩舎へ入れておいで！もし一頭でも逃がしたりしたら、ただじゃおかないからね！」

レー又姫はわざと自分の乗っていた白い馬の尻を叩きましたので、馬は新緑の芝が綺麗に刈り込まれた広場の中を駆け抜けて、どこかへ走り去ってしまいました。

「さあ、早速つかまえた！」

フェルナンド王子は、豚そっくりの小娘があまりにも可哀相になり、あとから来た自分の従者にレー又姫の白い愛馬を探して捕まえるようにと命じました。レー又姫は王子が豚娘を庇うのを見て、見るからに面白くなさそうな顔をしました。フェルナンド王子はそんなレー又姫の意地悪な態度を見かねて、豚娘にこう問いかけました。

「豚娘だなんて、あまりにもひどい呼び名じゃないか。きっと君にも本当の名前があるはずだ。それを僕に教えてくれないかい？」

豚娘は王子のあまりの優しさに、まごついてしまいました。それでとっさに偽の名前を思いつこうとしてみたのですが、自分に相応

しい呼び名がどんな響きをもっているものなのかが、やはりわかりません。美しい王子さまに、醜い顔のわりには可愛らしい名前だなんて、そんなふうに思われたくはありませんでしたから。

すると、レー又姫がまた意地悪く吐き捨てるようにこつ怒鳴りました。

「豚娘は生まれつき豚そっくりだったから、両親から豚娘と名付けられたのさ！その醜い小娘に豚娘以外の名前なんてありはしないんだよ！」

醜い小娘は王子の栗毛の馬と、自分の馬の手綱を震える手でぎゅつと握りしめると、二頭の馬をただ黙って厩舎へ連れていこうとしました。

フェルナンド王子はこの時、豚娘が目深に被っているフードの中から涙を零しているのを見逃しはしませんでしたが、彼女になんとも声をかけてやったらいいものかが、やはりわかりませんでした。

そしてレー又姫のことを、なんといい思いやりも優しいさのかけらもない、粗野で乱暴な娘だろうと、そう思ったのでした。

本物のレー又姫は、大人しく、とても行儀のよい二頭の優しい馬を厩舎の中へ連れていくと、馬糞くさい馬屋の中で、藁の中に顔をうずめて泣き続けました。そして彼女が随分と長いこと泣き叫んでいると、そこに例の衣装係のふたりの侍女が現れて、豚娘のことを両脇からがっしりと掴んだのでした。ふたりは無言を言わず、豚娘をレー又姫の衣装部屋へと連れていきました。

「どういうことなの……？」

豚娘はかつての自分の豪華な衣装の数々を前に、泣きながらふたりの侍女に訊ねました。

「さあ……わたくしどもはあなたさまにとびきりの晴れ着を着せて大広間へと連れていくようにおおせつかったですから。レー又姫さまはどれでもあなたのお好きな衣装を着てくださってかまわないとおっしゃっておいででした。さあ、どちらの御衣裳をお召しな

「さいますか？」

豚娘はかつての自分の華やかなドレスの中から、一番地味で目立たないものを選ぶことにしました。豚娘には、自分に化けている魔女リンダが自分のことを物笑いの種にしようとしていることが、よくわかっていましたから。

けれどもふたりの衣装係の侍女は、豚娘の選んだドレスでなしに、白い絹の布地にピンクの薔薇をいくつもあしらったドレスを豚娘に着せようとしました。ふたりは明らかに面白がっていました。

「あら、これはこれで可愛いといえないこともないんじゃないかしら？」

「そうね。ほら、頭にピンクの薔薇のコサージュなんかもつけて……と」

豚娘は鏡の中の自分のあまりにもアンバランスな姿かげんに、泣きだしたいほど惨めな気持ちでいっぱいでしたが、それでもかつての召使いたちに文句を言い立てたりはしませんでした。

かくして豚娘は大広間へと連れてゆかれ、集まった王侯貴族たちのいい物笑いの種になったというわけです。

さて、フェルナンド王子を迎えての、晩餐会を兼ねた祝賀のダンスパーティーがはじまりました。豚娘は大広間の片隅に立って、壁の花に徹しようとしておりましたが、非常に不思議なことに、この晩餐会を兼ねたダンスパーティーは、又姫とフェルナンド王子が主役であったのにも関わらず、絶えず人々の口の端に上るのは、豚娘の話ばかりでした。

「誰だい？あんなのをここへ呼んだのは？」

「さあ……ところであの豚みたいなのは、どこの貴族の娘さんなんでしょうね？なんというか、親の顔が見てみたいといえますか……」

「おい、おまえ。彼女をダンスに誘ってみろよ」

「嫌だよ、あんな豚そっくりなのと。おまえこそ、豚と踊る勇気があるんなら、誘ってこいよ」

大広間は絶えず、くすくすといったような忍び笑いと、ひそひそといったような囁き声とが交錯していました。

フェルナンド王子は豚娘のことがあまりにも哀れで、彼女のことをダンスに誘っても良いとすら思っていました。自分ひとりあえず、又姫をダンスにお誘いしなくてはなりません。ところがこのレー又姫に化けた魔女のリンダは、人間と手と手をつないでダンスを踊ったことなどは一度もありませんでしたから、ステップの踏み方がまるでわかりません。それでフェルナンド王子の足を何度も力強く踏んづけたあとで、自分から大広間のだ真ん中には、とんと倒れ込んでしまったのです。音楽の伴奏と踊りの輪が止まり、人々みなざわめきました。が、王女さまに向かって笑い声を立てることは、誰にも許されることはありません。レー又姫がフェルナンド王

子に助け起こされると、王宮の音楽隊の演奏が再開され、まるで何ごともなかったかのように、ワルツの続きが最初から踊られました。

レー又姫に化けた魔女のリンダは、どうにも決まりが悪かったので、怒ったような顔をして、破れたドレスの裾を引き摺りつつ、大広間を大足に歩いて出てゆきました。フェルナンド王子は壁のペンペン草と化している豚娘のところへ行くと、彼女の前に膝をつき、冗談めかして彼女の白い小さな手に接吻することさえして、豚娘にダンスの申し込みをしました。本物のレー又姫はダンスの名手として王宮内に知らぬ者はいくくらいでしたから、ふたりは大円舞曲の花形として颯爽とステップを踏み、踊り回り続けました。フェルナンド王子は豚娘のダンスの上手さにすっかり驚嘆していましたが、それでも笑ってしまわないようにとの配慮から、彼女からなるべく顔を背けるようにして、ステップを刻んでいました。

そしてレー又姫が着替えを済ませて再び大広間に戻ってきた時、大広間は割れんばかりの拍手喝采に包まれていました。もちろん、その拍手の大部分はフェルナンド王子に対するものでしたが、みんな心の中では豚娘のダンスの上手さを認めないわけにはいきませんでした。それにみんなから笑いにされていた豚娘を誘った王子の勇氣と優しさにも、みなは心打たれておりましたので、その後は一切、豚娘のことを笑ったりする者はありませんでした。

さて、ダンスパーティーが華やかな終焉で締め括られたあとは、正式な形での晩餐会です。座席の上座にはエシユタオルの王さまと王妃さまが座り、その次にフェルナンド王子とレー又姫、それからレー又姫のたつての頼みによって、彼女の隣には豚娘が座らされました。あとはレー又姫の兄弟の王子たちやそのお妃や婚約者、王侯貴族といった順に、長く大きなテーブルの座席は占められてゆきました。

ところで、この日の晩餐は豚肉の料理が中心で、晩餐会に招かれた人々はどうしてこうもつくつく豚肉の料理ばかりが続くのだろうと訝っていました。しかもメインディッシュは子豚の丸焼き……テーブルに着いている貴族たちはここまでくると、どうしてもあるひ

とつのことを意識しないわけにはいけなくなりました。つまり（豚そっくりの豚娘が、仲間の豚の肉を食べている……）ということ。それでも貴族の人々は、高貴な教育を受けている人たちばかりです。なんとか笑うまいとして、話をレーヌ姫とフェルナンド王子のおめでたい話のほうへと、意識的に傾けるようにつとめていました。しかし、子供というものは正直で、時に残酷ですらあるものです。ある貴族の子供のひとりが、隣に座る母親に向かって大きな声でこう言いました。

「お母さん、豚そっくりの人が豚の肉をとて美味しそうに食べているよ」

しかもその子供は豚娘のほうを指差してそうはつきり言いましたので、人々は笑いを堪えきれなくなりました。

と、その時……。

ポーンと豚肉の塊が天井高く舞い上がり、フェルナンド王子の皿の前へ、べちゃつと汚く落下しました。人々は一瞬、何が起こったのかわかりませんでした。その豚肉の塊はテーブルマナーというものをもまったく知らないレーヌ姫がナイフとフォークをガチャガチャとやった結果として、空中に放り上げられた、とこういうわけです。

晩餐の席は一気にしーんとなり、人々は何も言わずにただひたすら手元のナイフとフォークとを動かし続けました。例の貴族の母親は、自分の息子がなおも何か言おうとしているのを見て、その腕をつねって黙らせていました。

気詰まりな晩餐会の終わったあと、大広間では小音楽会が開催されることになっていました。貴族の方々がみな、レーヌ姫の歌声を聴いてから帰路につきたいものだ。とそう口々におっしゃられましたので、レーヌ姫は楽隊の音に合わせて美しいアリアを歌うことになったのです。

このレーヌ姫という王女さまは本当に、誰からも愛される、素晴

らしいお姫さまだったのですね。レーヌ姫はワルツの最中にすつ転び、晚餐の席においても大失態をやらかしましたが、王宮の貴族の中で彼女のことを少しも悪く思う人はありませんでした。みんなはきつとレーヌ姫がフェルナンド王子の目の前なので、とても緊張しておられるのだらうと、そんなふうに優しく暖かい眼差しですつと見守っていたのです。

ところが、レーヌ姫の声はいまや魔女リンダの下品で粗野な響きを持つそれと成り代わっていましたから、レーヌ姫はせっかくみんなが与えてくれた名誉挽回の機会を台無しにしてしまいました。魔女リンダはレーヌ姫のように正式に声楽を学んだことなどは少しもありませんし、音階などというものはさっぱりちんぷんかんぷんでした（つまり、魔女リンダはひどい音痴だったということですね）。

それにしても、魔女リンダがレーヌ姫の美しい歌声までを奪っておかなかつたことは、大きな失敗でした。レーヌ姫が音を外しつばなしで歌い続けていることに耐えられなかつた豚娘は、大広間の一番隅のほうで最初は小さな声で、けれども段々に大きな声で、美しいアリアを歌っていました。

貴族の方々はみな、目を閉じて豚娘の美しく澄んだ歌声に耳を傾け、フェルナンド王子も豚娘のほうを見ずに、彼女の綺麗な歌声に聞き惚れていました。みんなは豚娘の歌声を、豚のような顔に似合わず、なんとという美しい歌声だらうと思っていました。この夜つどつた貴族の中には、帰りの馬車の中で「この世のものとも思われぬほどの、天上の歌声」と評する者さえありました。

このようにして豚娘の印象は、彼女の醜い容貌と同じく、人々の心に長く焼きついて、そのあともなかなか忘れ去られることはなかつたということです。

フェルナンド王子がエシユタオル王国に到着したその翌日、レーヌ姫は王宮内に王子を案内する役を、王さまと王妃さまより賜りました。そこでレーヌ姫は王宮内の図書館や、王宮所蔵の美術品が数多く飾られてある、芸術の間などに王子を案内しながら、とりとめのない会話をしていました。レーヌ姫はフェルナンド王子の知性に足許にも及びませんでしたから、王子はとうとう心の中でレーヌ姫のことを次のように決めつけてしまったようです（以下の文章は、王子が自国に帰ってから書き記したと思われる、日記からの抜粋です）。

『わたしはレーヌ姫から受けた第一の印象は、一国の王女とはとても思われぬほどに下品で粗野、というものだった。まったくもってカンツォーネ王国も嘗められたものだ。このように何を話しても相手に付和雷同するしか取り柄のない女性を厄介払いとばかりに押しつけられなくてはならないとは……云々』

実際、フェルナンド王子はレーヌ姫と話をすることがあまりにもつまらなかつたので、ずっと豚娘のことばかりを考えていました。そしてとうとうレーヌ姫と王宮の西の渡り廊下を歩いている時に、庭のセンドンの樹の下に豚娘の姿を認めて、王子は豚娘のほうへと駆け去ってしまったのでした。

レーヌ姫は王子との会話ですっかり肩が凝っていたので丁度いいと思いましたが、第一豚娘が相手なら、王子がおかしな気持ちになることもないだろうと思えました。それで自分は天蓋つきの真鍮のベッドでぐっすり昼寝でもすることにしよう、肩を叩きながら、大理石の階段を上っていったというわけです。

豚娘はセンドンの樹の下で、悲しい思いでエシユタオルの三大詩

人のひとりである、ルバイヤートの詩集などを読んでいました。けれどもそこにフェルナンド王子が突如として現れましたので、びっくりした拍子に本を閉じてしまったのでした。

「おいで。本なんか読むよりも、もっと面白くて楽しいことをしよう」

王子がそう言って豚娘に向かって手を差しのばしてくださいましたので、豚娘は胸をきゅんとさせながら、王子の長くて細い指をとりました。

その時、太陽はちょうど中天にありましたが、ふたりにとって時間が過ぎゆくのはあまりに早く、あっという間に陽の沈む時刻がやってきてしまいました。

豚娘は王宮の中庭や温室などにフェルナンド王子を案内し、綺麗な色とりどりの花々に囲まれながら、いくつもの楽しいお話をしました。そしてそんなふたりの影が長くなって、日時計が夕暮れ時を知らせる頃、豚娘と王子は手に手をとって王宮の中へと戻っていったのでした。

きのうと同じ、フェルナンド王子を歓待するための、華やかなダンスパーティーや音楽会や晩餐会が盛大に開催されましたが、王子はレーヌ姫という間中、何をしていてもつまりませんでした。彼はいつも豚娘のことを目で追っただけで、早く彼女とふたりきりになってチェスでもしたいものだ、そんなことばかりを考えていたのです。

王宮の中庭にあるガラス張りの温室で、午後三時のお茶を飲んでいたら、豚娘は自分はチェスがとても得意だと言っていたので、王子は是非お手合わせ願いたい、豚娘に申し込んだのでした。

そしてとうとう貴族たちのおべんちゃにやおべっかに飽き飽きした王子は、豚娘を誘ってこっそりと大広間を抜けだしました。フェルナンド王子は自分の部屋へ豚娘を連れてゆき、召使いのひとりに命じてチェスの用意をさせました。

フェルナンド王子もレーヌ姫もチェスの名手でしたから、チェスの盤上では白熱したやりとりが、約二刻半あまりも続きました。時間にはもう真夜中になっています。レーヌ姫は欠伸が出、もうそろそろいいかげん疲れて眠たくなってもきていたので、わざと王子に勝利を譲ることにしようと、そう思いました。ところが王子は豚娘がわざと負けようとしていることに鋭く気づくと、チェス盤と駒とを大理石の床に叩きつけて、ぶちこわしてしまっただけでした。そして腹立たしさのあまり、戦況はどちらかという豚娘のほうに優位に働いておりましたので、豚娘に「興ざめた、でていけ！」と怒鳴りつけて、彼女を部屋から追いだしてしまっただけでした。

フェルナンド王子はその夜、悔しさのあまり苛々してなかなか寝つけませんでしたので、部屋の中をうろつくと歩きまわりながら、豚娘のことばかりを考え続けました。そしてなんとか彼女を自分のものにしたものだ、心の底からそう思ったのでした。

といつても、フェルナンド王子は何も豚娘のことを自分のお妃にしたいなどと考えていたわけではありません。王子はただ豚娘を自分の側近として、常に側近くに置いておきたいと考えていただけなのです。豚娘はあのとおり豚そっくりでしたから、王子にとっては恋愛の対象などになるはずがありません。けれども王子はだからこそ、豚娘を手許に置いて、自分の心の底からの悩みを打ち明けることのできる相談相手にしたいと思いました。また、悲しい時の慰め手として、彼女にいつもそばにいてほしいと、そんなふうに思ったのです。

ところで、フェルナンド王子が豚娘に対する高ぶる気持ちをなんとか抑え込みつつ、ベッドの中で眠りにつこうとしていた時、カンツォーネ王国からフェルナンド王子に向けて、ひとりの急使が遣わされてきていました。急使は王子の部屋のドアをノックすると、彼の「入れ」という声を待つてから、恭しく室内に足を踏み入れました。王子はせつかくうとうとしかけていたのに、と思いましたが、急使が部屋に入ってくるなり、すぐにあの哀れなヴァージニアのことを思い出したのです。

王子はうさぎの白い毛のぼんぼりのついたナイトキャップをはずすと、ベッドの脇に膝をついて畏まっている使いの若者にこう訊ねました。

「ヴァージニアの遺体が見つかったのか？」

「はっ」と、敬礼してから、使いの若者は王子の問いに答えました。「残念ながら、ヴァージニアさまの御遺体は、三日三晩軍を上げて大搜索したのにも関わらず、見つからずじまいでございました。谷川の下流のほうまでくまなく探したのでございますが、これ以上搜索しても成果は見込めそうにないとお言葉をわたくしめはヴァザリ將軍より頂戴いたしました次第でございます……」

フェルナンド王子はあまりにも丁寧な兵士の言葉遣いと恭しい態度とにうんざりして、彼をとっとと寝室から追い払うために、こう返信の言葉を返しました。

「ヴァザリー將軍にはこう伝えよ。ヴァージニアの遺体を搜索する必要はもうないとな。彼女はあまりにも清らかで澄んだ魂の持ち主であったので、情け深い神が彼女をそのまま天にまで導いたのやもしれぬ、と」

「御意」

フェルナンド王子が手を振って、下がれ、という合図をしましたので、急使の若者は床に額をこすりつけんばかりにして最敬礼をし、王子の寢室を辞去しました。

フェルナンド王子はヴァージニアの死をあんなにも悲しみ悼んでいたのに関わらず、彼女の遺体が見つからなかったことに対して、少しも落胆したりなどしていませんでした。非常に合理的な考えの持ち主であるこのフェルナンド王子は、考え方をすっかり切り換えて、ヴァージニアの死は彼女自身にきつと悩みや問題があったのが原因であって、自分には少しも責任はないのだ、とそんなふうに変えはじめるようになっていたのです。そして今はヴァージニアのことよりも豚娘のこのほうにすっかり関心が移っておりましたから、心の中で「我が心のヴァージニアよ、安らかに」と一言祈っただけで、彼女のことはそのあともう少しも思いだしたりしませんでした。

フェルナンド王子がエシユタオル王国に到着して三日目の朝、王子は国の来賓として朝から豪華なごちそうを食べ、王さまや王妃さまやエシユタオルの三人の王子さまたちと歓談なさっておいででした。そしてフェルナンド王子の姉君がお妃として嫁いだ第一王子から狩猟の誘いを受けると、側近の従者たちの中に豚娘も混ぜて、彼女と一緒に森の中でも逍遥しようと、そんな気にフェルナンド王子はなつたのでした。といいますのは、フェルナンド王子は狩猟がもうあまり好きではなくなっておりまして、どこか適当なところで三人の王子たちと別れ、豚娘とふたりきりで木洩れ日あふれる自然の中を歩き楽しみたいと、そう思っていたからです。

フェルナンド王子はその昔（といっても今からほんの二三年ほど前まで）、狩猟や鷹狩りの大好きな青年でしたが、ある日ふと、子うさぎのたくさん待つ巣の中へ帰ろうとしている母親うさぎを射止めてしまったところから、狩猟というものはなはだ野蛮な行為として憎むようにすらなつたのでした。それで第一王子のアルフレッドと第二王子のルークフリード、第三王子のエルベルトとは広い森の中を別々のルートをとることにして、最後に森の入口で再び落ち合うことにしようと、そういうことにしたのです。フェルナンド王子は三人の王子たちが競って森の中へと姿を消すのを見届けると、自分は弓矢や矢筒などを側近の従者たちに預け、豚娘とふたり、森の中へとゆつくりと馬を歩かせてゆきました。そしてフェルナンド王子と豚娘が薄暗い森の木立ちの間を馬に乗って進んでゆくと、やがて光の燦々と輝く、ちよつとした森の広場へと到着したのです。フェルナンド王子はここなら良かろうと思ひ、馬を降りると、豚娘が馬から降りるのを手伝ってあげることにしました。そして樵まきが残していった切り株に、豚娘と向かいあつて腰を降ろすと、こう話を切りだしたのです。

「僕の可愛い豚娘よ、よく僕の話聞いておくれ。僕は正直いつてレー又姫のことがあまり好きではない。だが、カンツォーネの次代の王としての責任を果たすため、彼女とは嫌でも結婚しなければならぬ。そこで、是非折りいって君に頼みがあるのだが、僕はすっかり君のことが気にいってしまったので、是非とも僕付きの側近のひとりになつてもらいたいのだが。こう言つてはなんだけれど、君はあまり器量も良くないし、レー又姫にもいじめられてばかりいる……そうだね？」

豚娘の落ち窪んだ小さな瞳から、ぼろりと透明な涙が零れ落ちました。豚娘はフェルナンド王子のあまりにも優しい心遣いに胸を打たれ、唇が震えて声もでないほどでした。

「僕の可愛い豚娘よ、泣かないでおくれ。もしも君が僕の申し出に首を縦に振ってくれるというのなら、僕は君のためになんでもしてあげよう。ただそのかわりに君は僕の悩みごとを聞いたり、僕がチエスをしたい時にその相手になつてくれるだけでいいんだ。君も王宮に出入りする人間なら、一国の王の責務というものがどういったものか、大体想像がつくだろう？僕には王としての激務をこなすかたわら、どうしても安らぎというものが必要なんだよ。僕は君を絶対に悪いようにはしないし、どんな苦しみや恥かしさからもきつと君を守ってみせる。僕は王さまや王妃さまやレー又姫に、君を側近として預かりたいと願いでるつもりだ……君は僕のこの申し出を承知してくれるね？」

美貌の王子にここまで言ってもらいながら、一体誰が首を横に振つたりできるでしょう！豚娘は涙があとからあとからぼろぼろと零れ落ちるのを止められませんでした。きつと今の豚娘の気持ちは、レー又姫が正式なプロポーズの言葉を王子から受ける時よりも、ずっと幸福なものであったのに違いありません。

ああ、なんて可哀相な豚娘！彼女がもしフェルナンド王子と元のままの姿で普通にお見合いしていたとしたらどんなにか……いいえ、こんなことをいつてみたところで、今さらはじまりませんね。お話

を先へと進めることに致しましょう。

ところで、レーヌ姫は自分の部屋でこのふたりのこういつたやりとりをずっと水晶玉に映して見ていたのですが、自分が豚娘に敗北したということがわかるなり、一気に逆上してしまいました。そこでレーヌ姫は、今フェルナンド王子と豚娘のいる森の広場よりずっと向こうにある、川の上流でニジマス捕りに勤しんでいた大熊に、こう命令を下したのです。

『豚娘を殺して、その骨の髄までをしゃぶりつくしてしまえ！』と。

さあ、大変です！物凄い勢いで大きな熊が森の中を駆け抜けて、フェルナンド王子と豚娘に向かって突進してきました。

熊は四つん這いになってずっと藪や林の中を駆けてきたのですが、ふたりのいる広場までやってくると、二本足で立ち上がり、豚娘めがけて鋭い爪で襲いかかってきました。フェルナンド王子は大切な豚娘を守るため、腰帯に帯刀している剣を鞘から抜き放ち、熊の脇腹にその鋼の刃を深く突き刺しました。ところが、こんなことくらいで熊はへこたれたりはしません。逆にますます獰猛になって、今度は標的をフェルナンド王子に変えてしまいました。

「豚娘！早く逃げるんだ！」

フェルナンド王子は熊の攻撃を巧みにかわしてはいますが、熊の懐に飛び込んでゆくことは至難の技でしたし、どうにも反撃のしようがありません。防戦一方です。レーヌ姫は水晶玉を見つめながら狼狽しましたが、もはやどうしても熊の野性を制御することができませんでした。そしてとうとうフェルナンド王子が切り株のひとつに躓いて、転倒してしまったのです。もはや万事休す。豚娘は恐ろしい光景を避けるために、両の掌で顔を覆い隠しました。

ところがその時、フェルナンド王子は勇敢にも熊との相打ちを狙って剣の先を熊の心臓めがけて貫きとおしましたので、大熊はフェルナンド王子の上に、その重い体をどっさりとのっけてきたのでした。

フェルナンド王子は自分の血と熊の返り血とを全身に浴びて、紅色に染め抜かれていました。フェルナンド王子にはもう、重い熊の体をよけるほどの力すらも残されてはいません。豚娘は腰が抜けてその場からなかなか起き上がれませんでした。それでもなんとか震える足を奮い立たせて王子のところまでいき、二百キロ以上はあるであろう熊の巨体をようやくの思いで脇へよけ、自分も血まみれになりながら王子の体を助け起こしました。

「王子！フェルナンド王子！」

豚娘は泣きながら王子の名前を呼び続けましたが、応答はありません（唸すらびくりとも動きませんでした）。

「誰か！誰か助けてください！」

豚娘の声は、あたりの森に虚しいこだまとなって響き渡っただけでした。二頭の馬はとっくの昔に驚き嘶いて逃げ去ってしまいましたから、豚娘は意を決すると、王子の七十キロはあるであろう剣術によって鍛え抜かれた筋骨逞しい体を、背中に背負うことにしました。けれどもやはり弱い女性には、そんなことは到底無理です。それでも豚娘はなんとか王子の体を森の入口にいる従者たちのところまで運ばなくてはなりません。豚娘が森の中を元来た道を走っていった、従者たちを呼んできたほうが早かったかもしれませんが、その間に王子の身に何かあったらと思うと、豚娘はやはり自分がかんとかするしかないのだという気持ちになりました。それで王子の体を力いっぱい引っ張り、引き摺れるところまで引き摺ってゆきました。するとその時、王子の意識が微かに戻ってきたようなのです！豚娘は今度こそと思い、王子に自分の背中に掴まるようにと促しました。王子もまともに意識のある時だったら、きつと女性の背中に身を委ねたりはしなかったでしょうが、何分意識が朦朧としておりましたので、豚娘に促されるがままに、彼女の背中に素直に身を委ねました。

これも愛のなせる業なのでしょう。豚娘がまだレーヌ姫であつた頃、彼女はナイフとフォーク以上に重いものなど何ひとつ持

ったことはありません。けれども今、彼女は愛する人を血まみれになりながら背負い、薄暗い森の小道をふらふらになりながら一歩一歩踏みしめるように歩いていました。毛穴という毛穴から汗が吹き出、熊のどろっとした血の、なんとも嫌な生臭い匂いまでしています。けれども豚娘は一国の王女としても、この愛しい人の命をなんとかして助けねばなりません。カンツォーネ王国には世継ぎの王子がフェルナンド王子しかいないのです。ここでもし王子が命でも落とすようなことになったら、せつかく両国間で百年続いた戦争が終結したばかりだというのに、同じ血の歴史が繰り返されることにもなりかねません。幸い、フェルナンド王子の馬と豚娘の馬とが森の入口の従者たちに異変を知らせてくれていましたから、豚娘がもう駄目だと思つて膝を着いた時、従者たちのやってくる馬の蹄の音が轟いてきたのです！

王子付きの従者たちは血相を変えて、豚娘のことなど跳ね飛ばし、フェルナンド王子のことを助けようとなりました。すぐにエシユタオルの三人の王子に向けて使いが飛ばされ、また王城のほうにも早馬が飛ばされました。

王城からはレーヌ姫の命によつてすでに医師の乗った箱馬車を送られてきていましたから、フェルナンド王子は従者たちの思った以上に早く、医師の手当てを受けることができました。

フェルナンド王子は朦朧とした意識の中で、何度もうわ言で豚娘の名前を呼びましたから、彼女がずっとフェルナンド王子の看護に当たることになりました。豚娘は三日三晩、ほとんど眠ることなくフェルナンド王子の額の氷嚢をとりかえたり、また王子の体の全身をくまなく清拭したり、医師が包帯をとりかえたり傷口に軟膏を塗るのを手伝つたりしました。また何もすることがない時にはただひたすら王子の右の手や左の手を握りしめ、神さまに必死にお祈りしました。『どうか神さま、フェルナンド王子の体の傷をお癒してください。また王子の意識を目覚めさせてください。そのためならわたしは本当になんでもします』と。そして実際に豚娘はなんでも

しなければならぬと、切実にそう感じていました。人の祈りというものは時として、行動としても現されなければならぬものなのです。それで豚娘は涙ながらにある決心をし、自分に化けたレーヌ姫のところへと、あるお願いをしに行くことにしたのでした。

豚娘が天蓋つきの真鍮のベッドのある寝室へ入っていくと、レーヌ姫は憔悴しきった顔をしていて、豚娘はこの顔がかつての自分の顔であったとは、とても信じられないくらいでした。

レーヌ姫は実際のところ、後悔と痛恨の思いに打ちのめされてきました。彼女は彼女なりにフェルナンド王子のことを愛していたからです。

豚娘はベッドに腰かけている、疲れきった顔の女の足許に身を投げだすと、床に額をこすりつけんばかりにして、懇願しました。

「どうかお願い！フェルナンド王子のことを助けてあげて！あなただったら彼の命を助けることができるはずよ！このまま目が覚めなうとお医者さまが今朝おっしゃったのよ。もしもあなたがフェルナンド王子の命を助けてくれるのなら、わたし、あなたのためになんでもするわ！一生あなたのために奴隷の身となってもかまわない！一生、この豚の顔のままだつてかまわないわ！だから、だからどうかお願い…… 王子の命を助けてあげて。そのためならわたし、本当になんでも……あなたのためになんでもします……」

豚娘の顔は涙のためにしわくちゃになり、見るもみっともない顔をしていました。レーヌ姫は豚娘のあまりにみっともない歪んだ顔に不愉快になり、吐き捨てるように意地悪くこう言い放ちました。

「なんでもするだつて！？本当に一生その豚みたいな顔のままでもかまわないっていうのかい！？本当に、二目と見られぬひどい顔だつていうのに、それでかまわないっていうんだね！？じゃあ約束したよ。あたしは王子の命をこれからいつて助けてあげようとも。ああ、自分から進んでそうするとも。そのかわり、おまえは一生その醜くてみっともない、豚そっくりの顔のままなんだからね！？本当

にそれでいいのかい!？」

「……わかりました」と、豚娘は惨めな哀れっぽい声で、レーヌ姫に返事をしました。そしてレーヌ姫が「準備があるからさっさと出ておいき!」と金切り声で叫んだので、言われたとおりに部屋を出て、とぼとぼと廊下を歩いていったのでした。

レーヌ姫は豚娘が部屋を出ていくと、レーヌ姫の美しさのエッセンスをひとつの小瓶に封じこめ、呪文を唱えて元のとおり姿に戻りました。魔女リンダは元のとおり自分の姿でなければ、魔女としての魔力を十二分に発揮することができないのです。

魔女リンダはフェルナンド王子を助けることは自分の命に関わることだと直観的に悟っておりまして、なかなか王子を尋ねて寝室へいく気になれなかったのですが、今、レーヌ姫の言葉を聞いて、やっと決心がつかまりました。魔女リンダはレーヌ姫の心の美しさに圧倒されたのです。

魔女リンダは生まれてから一度として人の役に立つために魔力を揮ったことなどありません……ですから、人の命を助けるなどという、とてもいいことに魔力を使ってしまったとしたなら、自分は魔力のすべてを失うか、あるいは死ぬことにだってなるかもしれない。けれども魔女リンダは魔女リンダなりにフェルナンド王子のことを愛していましたから、自分の命を犠牲にしても彼を助けたいと、そう強く心に決意したのです。

魔女リンダは王子の眠っている寝室に入っていくと、驚き怪しむ人々を一喝して出ていかせ、フェルナンド王子と自分と豚娘との三人きりになってから、一世一代の大魔術を行使したのでした。

「レスカリオテ・インディクルージィ・アルストリア・オンディキリヤ……」

魔女リンダは自然を司る風の精や水の精や火の精や大地の精霊に呼びかけると、王子の体を癒すための、自然の癒しの力を借りることにしました。精霊から力を借りるためには、その代償として自分の寿命を差しさなければなりませんから、これは非常に危険な、難しい癒しの業です。そして魔女リンダが癒しの業を行使するため呪文の詠唱が終わると、天上から黄金色の命の魂がくだってきて、

やがて眩く虹色に輝きだすと、王子の体全体を優しく包み込みはじめました。王子は新しい生命の息吹を、自然を司る精霊たちからいただき、それで甦ることができたのです！

魔女リンダは大理石の床の上にごっくりと膝をつき、激しい呼吸をしてはいましたが、命まで奪われはしませんでした。けれどもそのかわりに魔力のすべてを使い果たし、もう二度と魔法を使うことのできない、普通の人間の体になってしまったのです。

「ほら、これをあなたにやるよ」

魔女リンダは徐々に呼吸が整ってくる、ひび割れた魔石の嵌った櫂の杖をささえに身を起こし、レーヌ姫の美しさのエッセンスを詰めこんだ、小さな瓶を彼女の手に移しました。フェルナンド王子の全身の傷はすべて癒されましたが、まだ王子は目覚めてはいません。魔女リンダ　いえ、今はもうただの人間となってしまうた中年のおばさんのリンダは、杖をささえにしながら片足を引き摺り、王城を出ていきました。

フェルナンド王子が目覚めた時、そばにいたのは豚娘ではなく、真正正銘の美女、レーヌ姫でした。レーヌ姫は優しく微笑みながら、王子の片方の手をそつと握りしめています。

「……豚娘は？」

王子はレーヌ姫の手をさも忌々しげに振りほどくと、上体を起こして、あの豚のようにみつともない顔を室内に探しました。レーヌ姫は王子に向かって首をひとつ振ると、瞼を伏せながら　それがレーヌ姫の嘘をつく時の癖でした　こう言いました。

「豚娘は、傷を負った王子さまを途中で放りだし、どこかへ逃げていったのでありましょう。王子さまをここまでお運びしたのは我が国の三人の王子と、フェルナンドさま付きの従者たちでございます。さあ、今はまだ傷が癒えたばかりの身なので、王子さまはベツドの上でごゆるりと横になっていてくださいませ」

レーヌ姫はフェルナンド王子の体に白鳥の羽毛のたくさん詰まった掛け布団を覆い被せようとしたが、王子は布団をはねのけて、厳しい口調でレーヌ姫を咎めました。

「嘘だ。あなたは嘘をついている。あなたがどんなにごまかそうとしたところで無駄だ。豚娘は瀕死のわたしの体を背負って、薄暗い森の小道を歩いていったのだよ。あの小さな体で……わたしは意識が朦朧としてはいたが、彼女がふらつきながらも懸命にわたしを背負ってくれたのだということ、きちんと覚えているのだ。きつとあなたは豚娘に嫉妬するあまり、彼女から手柄を奪おうと豚娘のことを王宮から追いだしたのであろう。ああ、そうだ。きつとそうに違いない」

フェルナンド王子のあまりに冷たいその言い種に、レーヌ姫はシヨックのあまり口が聞けないほどでした。そしてレーヌ姫が美しい薔薇色の頬にはらはらと涙を零しはじめると、フェルナンド王子の

苛立ちは頂点に達しました。王子は手を打ちたたいて召使いを呼び、「レー又姫に御退出願うように！」

と、厳しく言いつけました。

ああ、なんて可哀相なレー又姫！フェルナンド王子はこれ以後、レー又姫に決して心の内を明かすということはありませんでした……もちろん、御結婚なされてから以後もです。実をいうとレー又姫は魔女リンダと一番最後に、こんな約束をかわしていたのでした。魔女リンダはレー又姫の美しさのエッセンスを封じこめた小瓶を返してはくれましたが、そのかわりに、とある条件をだしていたのです。それは『自分がかつて豚娘であったことは、決して王子さまに明かしてはならない』というものでした。もしもレー又姫が約束を破って自分が豚娘であったことを明かしてしまったとしたら、レー又姫は豚娘の姿に戻ってもう二度とは元のとおり姿にかえることはできないというのです。レー又姫はジレンマに苦しみました。が、きっとフェルナンド王子も結婚して自分の良さをわかってくださりさえすれば、豚娘のことを愛したのと同じ愛で自分のことをもう一度愛してくださるはずだと、そう信じてカンツォーネ王国へと嫁いでいったのです。

エシユタオル王国とカンツォーネ王国の二国間では、フェルナンド王子とレー又姫の御結婚を祝福するために、城下町の広場などで国を上げての大祝宴会が開催されました。またフェルナンド王子とレー又姫はエシユタオルとカンツォーネの主要都市でパレードの馬車に乗って国民のみなさんに挨拶して回りましたし、小さな町や村でもおふたりの御成婚を祝して、色々なおめでたいイベントが開催されました。その他、ふたつの王国からは町人や村人に二国間の平和を記念した特別の硬貨が配られたり、王国所蔵のとおきのお酒樽がいくつも開けられて、無尽蔵と思われるくらいのお酒がふるまわれたりしました。

エシユタオルとカンツォーネの国民はみな、暗い戦争の影のことなど忘れ、夜どおし歌い踊り浮かれ騒いで大祝宴会の一週間を過ご

しました。

フェルナンド王子とレーヌ姫が御結婚されたこの年、恩赦として百年戦争の戦犯者が七名、牢獄から出所したという記録も王宮の文献には残っています。また二国間で盛大な花火が毎晩のように打ち上げられたという記録などからも、エシユタオルとカンツォーネの国民がどれほどのふたりの結婚を祝福し、喜びに酔いしれたかを窺い知ることができるでしょう。けれども人々が羨望の眼差しで美貌の王子と妃とを見つめるほどには、ふたりの間柄は仲睦まじいものではなかったようです。

パレードの間中、フェルナンド王子はレーヌ姫の片手をしっかりと握りしめ、国民に向かって笑顔で手を振っていました。ひとたび人目がなくなると、レーヌ姫の手を冷たく突き放して、そのあとはろくに口さえ聞こうとはしませんでした……レーヌ姫はどんなにかおつらかったことでしょうね。それでも誰に対しても一言の文句さえこぼさずに、笑顔で国民のひとりひとりに挨拶なさっておいでだったのです。レーヌ姫は盛大な祝宴の宴が終わったあと、今度は心細さと寂しさで、死ぬほど悲しくなりました。小さな頃から慣れ親しんだエシユタオルの王城を離れて　両親や兄弟や貴族の友人たちからも離れて　たったのひとりぼっちでこれまで敵対してきた隣国に嫁いできたのです。フェルナンド王子だけが頼みの綱でしたが、カンツォーネの王宮で彼女に一番つらくあつたのは誰あるう、レーヌ姫の夫であるフェルナンド王その人でした。王子は結婚と同時に年老いたお父上よりカンツォーネの王の御座をも引き継いでいましたから、今はフェルナンドⅡルイⅡカンツォーネ王となつて国を治めています。そしてレーヌ姫はイレーヌⅡマリアⅡカンツォーネ王妃となられたのでした（レーヌ姫の本当の名前はイレーヌⅡというのですが、国民の皆は彼女を愛して、一般にレーヌ姫、レーヌ王妃と愛称でお呼びしたのです）。

フェルナンド王子が王になってから初めてしたことはといえば……なんと！エシユタオルやカンツォーネの国中からみっともない顔

の女性や不細工な娘、一般に醜女みにくいと呼ばれる女の人たちをたくさん呼び集めることでした。カンツォーネの王の謁見の間から王宮の正門のある跳ね橋のずっと向こうまでは、こうした一般に顔に欠陥のあるとみなされる女性の行列がえんえんと続いていました。そしてフェルナンド王はひとりひとりの女性の顔をじっくりと眺めては、「豚娘はこんなに可愛くなかった」だの、

「豚娘はもつと豚そっくりで不細工だった」だのと呟き、バンバン！と木槌を腹立たしげに打ち叩いて、「次！」と近衛兵に命じるのでした。

エシユタオルとカンツォーネの王国のあらゆる町や村には、フェルナンド王直筆の豚娘の似顔絵があちらこちらの壁に貼られ、また軍の隊長の指揮による、聞き込み調査なるものまで行われたのでした。

フェルナンド王はあちらの山村に二目と見られぬ顔の醜い女性がいると聞くと、自ら馬を駆ってでかけてゆき、またこちらの城塞都市に豚そっくりの不細工な顔の女性がいるという噂を聞くと、その女性を王城まで連れてくるようにと部下に命じるのでした。

フェルナンド王はとにかく豚似の女性に関する情報を広く求めましたので、王直筆の貼り紙を見た町民や村民の幾人かは、王はきつと高級な豚そのものを求めておられるのではないかと勘違いし、たくさんの雌の豚の贈り物が王さまに献上されるということもしばしばだったようです。なにしろ『豚娘を見つけた者には賞金100万クラウン』などと貼り紙には書かれてあったのですから、無理もないことですね。

それにしてもフェルナンド王は何ゆえにここまで豚娘にこだわっているのでしょうか。豚娘というのはいわば、レーヌ姫の影のような存在であり、影の本体であるレーヌ姫はフェルナンド王に冷たくぞんざいに扱われながらも、なお彼のことを愛し、恋慕しているというのに……。

後世の歴史家の幾人かは、彼が「美人は三日で見飽きるが、豚の

ように醜い娘は三日で見慣れる」という有名な格言を残していることに注目し、フェルナンド王はおそらく、レーヌ姫のあまりの美貌と完璧なまでの性格の良さと如才なさに辟易し、その反動として醜い女性に一生の間給付金を支給するほどのめりこんだのではないかと指摘する人たちがいますが、わたしはそうは思いません。いえ、基本的にはこうした歴史家たちの意見と同じことになるのかもしれませんが、わたしはこう思うのです。人間というものは皆、影のある存在ですから、それ故に人は影のない人間を愛することなど到底ではしないのです。わたしたちはみな影を持ち、その影の濃い人間にこそ惹きつけられるものなのです。豚娘はレーヌ姫の影そのものでした。ですからフェルナンド王は影の消えてなくなったあとのレーヌ姫を愛することは、とてもできなかったのに違いありません。

ところで、魔女リンダのその後についてですが、彼女は魔力を失ったただのリンダという名前の平凡な中年のおばさんになっていました。彼女は街の辻で物乞いをしたり、また魔女であったころの知識を活用して占いをするなどして、なんとかその日その日を食べ繋いで生きるという、根無し草の生活を送っていました。けれどもエシュタオルのレーヌ姫とカンツォーネ王国のフェルナンド王子の御結婚による恩恵は、町や村にいるどんな乞食にも及んだくらいでしたから、リンダもまた浮かれ騒ぐ人々の輪に加わり、ただで美味しいものを食べたり飲んだり、楽しく歌ったり踊ったりして、一応人並みの生活をするだけの基盤を整えることができたようです。つまりどういふことかと申しますと、リンダがあまりにも調子はずれな歌声で歌を歌いますので、城下町の酒場の人々はそんなリンダを面白がり、毎晩のように彼女に向かって銀貨や銅貨をやんやんやと投げつけたと、こういったわけです。

リンダは惨めな乞食であった頃、もう死んでしまおうかなとも思いましたが、人間の心の暖かさや優しさに支えられ、今ではある人の口利きでカンツォーネの王城の小間使いとして雇い入れてもらえることにもなりました。

リンダはエシュタオルの王城をでると、すぐにカンツォーネ王国の王都を目指したわけなのですが、そのことにはふたつの大きな理由がありました。リンダはエシュタオルの王国で悪いことをたくさんしてかしていましたから、いつどこで誰に後ろ指をさされて捕えられるか知れませんでしたし、なんとかして仕事にありつくためには人口密度の高い王都が一番だろうと思われました。それともうひとつ　リンダはフェルナンド王子のことを彼女なりに心から愛していましたから、王子のいる王城のある町で暮らしたいとの思いもありました。フェルナンド王の命をお救いしたということは、いく

ら自業自得とはいえ、リンダにとって大変名誉に思われることでしたので、リンダは王の命をお救いしたとの誇りを胸に、今は王宮の小間使い兼洗濯女として一生懸命に働いています。

リンダは人間として様々な苦労を経験し、今ではすっかり改心していました。彼女はただひたすら大人しく高貴な人々に言いつけられたとおりにし（それがたとえどんなにつまらないことであれ）、ただひたすら黙って毎日たくさんの量の洗濯をし続けました。リンダは心の中で幸福というものを否定し、自分が幸福になれるなどは、夢にも思っていないませんでした。人間が生きるために苦労をするのは当然のこと、自分はこれまで楽をしてきたのだからその報いがいま与えられているのだと、そう考えるようになっていたのです。

ところで、王宮には下男と呼ばれる召使いが何人もいるのですが、彼らは王宮の雑用係として働いています。王宮内の暖炉にくべるための薪を割ったり、庭の樹木を剪定したり、厩舎の馬の世話をするなどなどが彼らの役目でした。そしてその下男から出世して今は王城の執事となっている男に、ディックという名前の中年的おじさんがいました。このディックという男は非常に寡黙で真心のある、誠実な男で、フェルナンド王のお気に入りでした。ディックはその昔、下男として王宮に出入りを許された初めの頃、さる高貴な生まれの方と間違いを犯してしまったことがあります。ディックは自分の下男としての身分も忘れ、その貴族の女性にすっかりのぼせ上がっていましたから、その女性が名門貴族出身の男性と結婚してしまった時は、大変なショックと鬱状態に近い、非常な落ち込みとを経験しました。

失恋というものは誰にとっても悲しくつらいものですが、ディックはそれ以来すっかり女性不信に陥ってしまったのです。

ディックの父親は城下町で酒場と料亭を営んでいます。ディックの母親は酒場に入りしていた男のひとりと駆け落ちし、真面目で口数の少ない父親と幼い自分とを捨てて出ていったのです。ディックは美しかった母親のことと、貴族の女性のことを重ねあ

わせ、もう二度と女なんか信じない、とそう固く心に決意していました。ディックはもう四十を過ぎようかという年齢に差しかかっていますでしたが、フェルナンド王が何度良縁を結ぼうとしても、かたくなにそれを辞退し続けていたのでした。ところが、王宮にリンダがやってくると、ディックはたちまちのうちにリンダに惹きつけられるようになっていったのです。

ディックがリンダに抱いた最初の印象は『貧しい嫁かず後家』というものでしたが、ディックは多くの召使いたちを束ねる執事の立場として、すぐにリンダに対して深い興味と関心を覚えてゆくようになりました。

リンダは言われたことはなんでもすぐに手早くこなし、仕事ぶりも真面目で、どんなに小さなことにも丁寧な、真心を込めて作業していることがディックにはよくわかりました。

ディックはリンダが若いメイドの二倍の量の仕事をこなしながらも文句ひとつ言わずにいるのを見て、次第に女性として心を惹かれるようになっていきました。それで仕事を監督するふりをしては、リンダに熱い眼差しを送っていたのですが、当のリンダはといえば、おっかない執事が自分のことを睨んで監視しているとは思ってはいませんでした。

そしてそんなある日のこと、黄金の陽射しを一身に浴びながら、ただひたすら無心に洗濯をしているリンダに、ディックはプロポーズしました。リンダはあまりにも突然のことに驚きましたが、ディックの気持ちが嬉しくもあり、また彼がもし断られたとしたら自分はもう生きていけないだろうというような、逼迫した表情をしていたこともあって、彼のプロポーズをすぐに承諾することにしたのでした。

ディックとリンダは、今は城下町の酒場兼料亭の二階に、ディックの年老いた父親と三人で暮らしています。リンダはとても幸福でした。何故なら心の底から欲しいと思ったものが、生まれて初めて手に入ったからです。

さて、フェルナンド王とレーヌ王妃のお話に戻ることに致しましょう。フェルナンド王は結婚後、暫くの間は王としての務めも忘れてレーヌ王妃のことを放つたらかしにしていました。フェルナンド王は豚娘の捜索に熱中するあまり、時々自分が結婚していることさえ忘れておりましたので、レーヌ王妃に恥をかかせたことも一度や二度ではありませんでした。

フェルナンド王は一国の王である自分がこんなにもやつきになつて豚娘を捜しているのに、どうして豚娘が見つからないのか不思議でなりませんでした。フェルナンド王がレーヌ王妃のことをどんなに追及しても、彼女は一向に口を割ろうとはしません。彼女はただ「豚娘はあなたを置いて逃げたのです」とだけ答え、あとは薔薇色の美しい頬をはらはらと涙で濡らすだけなのです。フェルナンド王はもしやレーヌ王妃が豚娘を亡き者にしたのではないかとさえ疑いはじめ、自分の妻に対する憎悪を抑えることができないくらいでした。それでフェルナンド王はなかなかレーヌ王妃を知ろうとはなさいませんでしたし、王は自分の妃を知るようになってからも、やはり相変わらず冷たい暴君であり続けることをやめはしませんでした。

そしてフェルナンド王が豚娘のことはあきらめるしかないであろうかと、憂鬱な気持ちで考えはじめていたある日のこと、ひとつの福音にもまさる喜ばしい吉報が、フェルナンド王にもたらされたのです。なんと、カンツオーネの王都からそう遠くない谷あいの小さな村に、二目と見るこのできない、つぶれた顔の女性がいる、との報告が、ヴァザリー將軍の部下よりもたらされたのです。

フェルナンド王はつまらない貴族院の会議など途中でうつちやらかし、自ら馬を疾駆させ、自分の最も信頼する従者たちだけを引きつれて、その谷あいの小さな名もない村へと向かいました。

今度こそ豚娘であるのに違いない、との確信が、フェルナンド王にはありました。何故ならその二目と見ることでできない顔のつづれた女性は、ヴァザリー將軍の部下が王城へ連れていこうとすると、「自分のように醜い女が王さまのお目にかかるだなんてとんでもない」と答えたというからです。なんとも豚娘の言いそうなことだと、そうフェルナンド王は思いました。

ところが、フェルナンド王が廃屋も同然の、豚娘かもしれない女性の住む家屋へ尋ねていくと、王の目あての女性は豚娘ではありませんでした。確かにその女性の顔は半分が醜くつぶれ、あとのもう半分は醜く歪んでいましたし、その上隻腕でびっこを引いてもいましたが、豚娘ではなかったのです。王はその女性のアマリの醜さに顔を背けずにはいらませんでした。

この女性は実をいうと、小高い尖塔のような崖から谷川へ向かって身を躍らせた、あのヴァージニアその人でしたが、本人が記憶というものを喪失していたこともあり、王には彼女がヴァージニアであるとは、少しも気づくことができませんでした。

王はこの醜い女性が豚娘でなかったことがわかるなり、落胆と失意のどん底にまで突き落とされましたが、それでもその女性に一生惨めな思いをしなくてすむよう、広い土地付きの家屋を与え、信頼できる後見人を見つけることさえして、多額のクラウン金貨を後見人をおして毎月受けとれるようにもしてあげました。

この醜い女性は頭が少しおかしくなっており、何を喋っているのか周りの人間も時々よくわかりませんでしたし、村の悪い男たちの慰みものにもされていきましたから、色々と法的に守られる必要性があったのです。

フェルナンド王は、王城まで戻る帰りの道すがら、この世に豚娘以上に醜い容貌の女性がいることを知って、深い衝撃に打たれていました。このごろフェルナンド王は、記憶の中の豚娘の顔を多少美化して想像しつつありましたから、豚娘を目の前にしていた頃はとも考えられもしませんでした。今では彼女こそが自分の理想の女性ではなかったかと、そんなふうにする考えはじめようになっていたのです。

とても不思議なことなのですが、フェルナンド王はレー又王妃の歌の上手さやダンスの上手さには、少しも心を惹かれませんでした。レー又王妃の美しい歌声を何度聴いても、いや、豚娘のほうがもっと魂をこめて歌を歌っていたと思ひ、レー又王妃と呼吸ぴったりにダンスを踊ってみたところで、一国の王女であった人がダンスが上手いのは当たり前だとか、そんなふうにしかなかったのです。そして何より王がこだわったのは豚娘とのチェスの勝敗でしたが、王は豚娘にわざと負けられて以来、チェスの研究と習練を積み重ねていましたから、今では容易にレー又王妃のことを打ち負かすことができるようになっていたのです。

一体、フェルナンド王のこの埋められぬ豚娘への思いをどうしたらいいのでしょうか。王は見るからに憂愁を帯びた表情をして、王城へ戻るために、どこまでもなだらかに続く田園風景と放牧地との間を、豚娘に思いを馳せながら馬に乗って歩んでいます。王は新緑の季節に豚娘と出会いましたが、今はもう小麦の刈り入れの季節になっていました。沈みゆく陽の光を浴びて蜜色に輝いている田園風景から、遠くの丘陵地帯を見渡してみると、たくさんの羊の群れが羊飼いや牧羊犬に追われてゆくところでした。その田園と牧草地帯は優秀な酪農家のラリー・バートラムの領地で、そのラリー・バートラムは豚小屋から逃げだした丸々と太って豚殺されるのを待つば

かりの逃亡豚を追つてくるところでした。優秀な酪農家のラリー＝バートラムは、従者のひとりが掲げ持つ赤い気負い獅子の紋章旗を見るなり、これはなんとしたことだ！と焦燥しました。自分がこれまで手塩にかけて飼育したピンクの雌豚が、フェルナンド王の一行を指して物凄い勢いで遁走していくではありませんか！しかし、ここまで立派に育てた豚を今さら手放してなるものかと思つたラリー＝バートラムは、なんとか王に失礼のないようにして、豚の野郎とつ捕まえなくてはと全速力で走つてゆきました。

このピンクの可愛らしい雌の豚はまるで直訴でもするかのように、フェルナンド王の一行の目の前で立ち止まりました。そして馬車が二台やつと通れるか通れないかの道を、あつちへうろろ、こつちへうろろしながら、可愛らしいおしりの尻尾を振つていたのです。ラリー＝バートラムはやつとの思いで自分の飼ひ豚に追いつくと、「えいつ！こんちくしょうめ、王さまの御前でなんと！無礼な豚だ！」と悪態をつきながら手に持っていた木の枝で丸々と太つた豚の尻をピシピシと打ちたたきました。ところがラリー＝バートラムがいくら雌豚を道から追い立てようとしても、丸々と肥えたこの豚は、ただじつとつぶらな瞳でフェルナンド王のことを見上げるばかりです。

「……つかまえる」とフェルナンド王は自分の部下たちに掠れた低い声で命じました。

「は？」と、従者たちは王さまの発した命令が聞きとれなかった様子で、王に聞き返しています。

「この男を捕まえて牢屋に入れると言つているんだ！そしてこの可愛らしい豚を、王城のわたしの部屋まで連れ帰るんだ……わかつたら早くしろ！」

「ははっ！」

可哀相に、優秀な酪農家のラリー＝バートラムは、豚たたきの罪状により、牢獄行きにされてしまいました。そして三日間牢獄に入られた揚げ句、三十九回の鞭打ちの刑に処されてのち、ようやく

我が家へと帰ることが許されたのです（我が国では投獄されることを俗に豚箱行きなどと言いますが、語源はどうやらこのあたりにあるらしいというのは、言語学者たちの話です）。

フェルナンド王はこの時連れ帰った雌のピンクの豚にドレスとりポンをオーダーメイドで仕立て屋に作らせ、一生の間この豚を大切に可愛がったといえます。

世にきこえし名君、フェルナンド豚骨王とんこつの誕生でした。フェルナンド王は動物の中でもとりわけ豚のことを骨の髄まで愛したということで、後世の歴史家たちに豚骨王などという、ちよつと格好の悪い名前で親しまれることになつたのです。

フェルナンド王はさつそくとばかりに『豚殺禁止令』とんざつなるものを発布したのですが、この法令は全住民から大変なブーイングを巻き起こしましたので、一年と経たないうちに廃止せざるをえませんでした。それでもその約一年の間に、豚殺しの罪で火刑に処された者が三名、豚たたきや豚いじめなどの罪で捕えられ、文字どおり豚箱行きになつた者が三百四十三名を数えたと、王宮の司法官の記録には残っています。

フェルナンド豚骨王は、豚を一生の間偏愛しましたが、それでも世にきこえし賢君として、カリスマ的な人気を誇る王でもありません。だから、豚以外のことで王を非難する者は、カンツォーネ王国にひとりとしてありませんでした。

フェルナンド王はまた、王としての責務をレーヌ王妃にも十二分に果たしましたので、レーヌ王妃は七人の子供を身籠つて、その子供たちを賢君賢姫として立派に養育しました。これから十四代まで続く、平和の礎をレーヌ王妃は生みおとしたといってもおそらくは過言でなかつたでしょう。とはいえ、フェルナンド王があまりにも豚に夢中なのを見るにつけ、レーヌ王妃は一体何度「自分の子供たちと豚とどちらが大切なの!？」と叫びたかつたことでしょうか。

王は晩年、王位を自分の息子に譲つたのちは豚の飼育に非常に力

を入れ、たくさん豚の研究論文を残したことで有名です。

レーヌ妃殿下は、フェルナンド陛下が崩御なさる直前に「豚娘……豚娘……」と、豚娘の名前ばかりを呼ぶのを聞いて、よほど「本当はわたしこそがあなたの愛する豚娘だったのです」と打ち明けようかと思っただけでしたが、結局王は真実を知ることなくこの世を去りました。

ところで、フェルナンド王のお気に入りだった執事のディック・バーンスタインですが、彼はその後、優秀な豚飼育の能力を王に買われてトントン拍子に出世していき、大臣にまで昇進したということです。ディックの愛妻のリンダ・バーンスタインは、この世の富と権力を手にしたのちも、夫に対して従順でとても感じのいい人だったと、カンツォーネの貴族たちの間には語り伝えられています。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7643e/>

魔女リンダと美女レーヌの争い

2010年10月8日15時36分発行